

戦姫絶唱シンフォギア  
狂槍姉妹

金欠生首

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

このお話は本来の歴史とは少し違った世界

初代ガングニール奏者『天羽 奏』は絶唱を使った代償として塵となった『風鳴 翼』を見た果てに『彼女を守れなかった自分』『ノイズ』『自分から大事な人達を奪う世界』を激しく憎悪した結果、LINKERを必要とせずともギアを纏えるまでの適合率を手にする。

その後、彼女は特異災害対策機動部二課からガングニールを保有したまま離脱。

以降、ノイズが現れた場所に不意に現れては狩り尽くし、去っていくを繰り返していた。

それから二年後、ノイズを狩る最中で彼女はもう一人のガングニールの少女『立花響』の襲撃を受ける。

戦いの最中、彼女の涙にも似た叫びの中で彼女もまた『奪われ、壊れた者』と知る。幾度の戦いの果てに二人は互いを『似た者同士』と認識し共に行動を重ねる様になった。

そんな世界線の話

※基本的には、狂槍姉妹世界線の出来事をオムニバス形式で書いていく予定です。それぞれのキャラクターの変更点は設定等で書く予定なのでそちらをどうぞ。

# 目次

名場面集	1
狂槍姉妹	4
英雄を目指し英雄となった男	9
二人で作る夕食	21
滅槍・ガングニール	26

# 名場面集

【英雄の横に並び立つ者達】より

「謝らせてください。君たちをこんな危険な事に巻き込んでしまうことを」

男は目の前の敵を睨みながら謝罪を口にした。

守るべき人々を自分の落とし物のせいで戦いに呼び込んだ事を

「あ、謝らないでください」

「そうデスよ。私達は私達の意味でここにいるんデスから」

「しかし！」

「ヒーローに助けてもらった。そして、ヒーローと一緒に戦う力を手にしたなら」

「ヒーローと一緒にいっちょよ世界を救うとするデス！ ヒーローさんとはその後になっ

ぷりお話するデスよ」

少しばかり敵から目を離して二人の少女を見た時、顔に見える芯の強さと戦う意思は男にこれ以上の謝罪は不要と言うことを言葉と同じように伝えていた。

その顔を見た男は…拳を強く握り、構えなおす

「フツ…そうですね。なら、早く世界を救わないといけませんね」

「うん。やろう、ヒーローさん！切ちゃん！」

「了解デス！ さあ、未来を切り開いてみせるデス！」

【響 壊槍】より

「なんで……なんで……」

目の前で燃え盛る家を見ながら少女は涙を流す。

隣で泣き崩れている母と祖母、そして自分を尻目に目の前にいる若者は声高らかに叫び始めた。

「半年前、このガキは他人を殺して生き残った人殺し！ 人殺しには相応の罰が下りなければいけない！ なのに、国は何も罰を与えない……ならば！ 私達市民が罰を与えるべきなのです！ そう！これは人殺し……そしてその人殺しを産んだ家系への罰なのです！」

その声を聞いた野次馬の反応は多種多様だった。

やりすぎと言う声もあれば賛成する声もある。

若者を咎め、取り押さえようとする者もあれば彼女達を罵り石を投げる者もいた。

「まだ人殺しが生きてるじゃないか！ 死んだ友達の名を討ってくれよ!!」

「なに馬鹿な事を言ってるんだ！ 彼女だって被害者だろうが！」

そんな野次馬の言い争いが取っ組み合いに変わり、場が混乱する中、彼女の心は黒く塗りつぶされ始めた。

「目の前の人が増い、石を投げる人達が増い、人殺しと罵る人達が憎い……あの日出てきたノイズが憎い、憎い、憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎い……憎い!!」

彼女の心が人とノイズへの憎しみで黒く塗り潰された時、彼女の心に一つの歌が浮かんできた。

「響?」

ゆらりと立ち上がる娘に心配そうに母は声をかける。

そんな母を気にも止めず、少女は叫んだ。

「B a i w i s y a l l ツ ! N e s c e l l ツ ! g u n g n i r t r o n ツ  
!」

彼女の叫びが天に轟くと彼女の胸から光が広がり……

「グルワアアアアアアア!!」

その光は黒き復讐の塊を生み出した。

## 狂槍姉妹

「これでラスト!……そっちはどうだ、二槍」

「こっちもこれで終わった」

「なら、さっさと行くぞ。ダンナに見つかったら厄介だ……って、言った側からか」

『口は災いのもと』って諺知ってる、一槍?」

いつも通りノイズを片付け、去ろうとする二人の前に一台の車が止まり、中から屈強な男性と真面目を形にしたような男性が降りると二人は何時でも動ける様に感覚を研ぎ澄ませた。

「またアンタ達か」

「ああ。また俺達だ」

「お久しぶりですね、奏さん」

「アタシとしてはもうしばらくは会いたくなかったけどね」

「連れないことを言うな奏。何度も聞いたと思うが改めて言おう。戻ってこい奏。そし



て、ウチに来ないか響くん」

「そいつは聞けない用件だ、弦十郎のダンナ」

「私に居場所は必要ない。用が終わったならさっさと消えて」

弦十郎の誘いを何時もの様に一蹴すると二人は振り替向く事なくその場を後にした。

「聞いていたんだろ、人形」

「あら、気づいてたの」

「で、何の用」

「あら、拳の方は物騒ね。マスターから二人にお話があるから連れてこいって、お使い頼まれてね」

「なるほどな。どうする二槍？」

「行く宛も無いんだし丁度良い」

「てなわけだ。ほら、さっさと連れてきな」

「はいはい。じゃ、掴まりなさいな」

人形は1つの結晶を取り出し地面に叩きつけた。

そこを中心に描かれた陣は三人を囲み、その場から消えた。

―異次元空間内　チフォージユ・シャトー内部―

「マスター。装者二人、お連れいたしました」

「ご苦労だった、ガリイ。下がっている」

「了解しました。マスター」

「さて、二本のガングニール。来てくれて感謝する」

「そんな大層な前フリは要らないよ。整ったんだろ、世界分解の準備が」

「その通り。さしあたってお前たちに頼みたいのは」

「邪魔者の排除……でしよ？」

「話が早くて助かるぞ、拳の。先史文明の巫女は確実に邪魔をしにくる。そこをお前達二人ともう一振りの槍に願いたい。残りはオレの人形達に任せておけ」

「分かった」

「ところで、もう一振りの槍って誰なんだ？　いくらアタシと言えど顔も知らない奴と手は組めないよ」

「安心しろ。そろそろ……つと、来たようだ」

キャロルが笑みを浮かべると二人の後ろに陣が現れ、二人はその陣から人が現れるのをただ静かに見つめていた。

「……貴女達が私と同じ GANG ニールを持つ者ね。マリアよ。よろしく」

「奏だ。よろしくな」

「……響」

三人の槍の挨拶が終わったところでキャロルは立ち上がり宣言した。

「さあ、世界の分解を始めよう。万象黙示録の為に」

「アタシは復讐の為に」

「私は世界を否定する為に」

「私は全てを終わらせる為に」

奏、マリア、響はそれぞれの想いを胸に動き出す。

人類よ……終焉への足音が聞こえるか

## 英雄を目指し英雄となった男

「ミカ!？」

「なんだ！ 新手か！」

「違いますよお嬢さん。私は、味方ですよ」

「イタタ……オマエ、何者ナンダゾ？」

瓦礫から身を起こし、自分を殴り飛ばした影に向かって名を問うミカに対し……いや、周囲に対してその影は立ち込める土煙を払い、名を明かした。

「僕が何者か……いいでしょう！ 自分を倒す相手の名を覚えておきなさい。僕はD r. ウエル……世界の崩壊を止める……英雄d 「邪魔」 ツうぐア!？」

しかし、名乗り終える前にアームドギアの力を込めた拳によって鳩尾に強力な一撃を受け、体をくの字に曲げる事になった。

「駄目じゃないか……がはっ……名乗りを邪魔しちや……」

「英雄ごっこがしたいなら余所でやって。それに……私はヒーローなんて信じない」

「そうですか……でも、世界の崩壊を望む君達を止める……それは紛れもなく」

「っ!？」

「英雄に憧れ……英雄を望み……英雄を目指す!!」

「チッ! 離せッ!!」

「この僕の! やるべき事だ!!」

「っ!?! しまつ……」

「二槍!」「響!」

体をくの字に曲げながらも…血を吐きながらも決して少女の腕を離さなかった男は、左腕に装着していた巨大な機械の腕を地面に叩きつけ、大地を爆発させると共に周囲に紅い霧を漂わせた。

「フイーネ! お嬢さん! 聖遺物の相手は聖遺物にお任せしますよ!!」

「フツ。いいだろう。行くぞ、クリス」

「ああ! アンタも簡単にくたばんじゃねえぞ! 英雄さんよ!」

紅い霧の中で言葉を掛け合うとフィーネとイチイバルの少女ことクリスはソロモンの杖でノイズを召喚し、ガングニールの装者達の復讐心を掻き立てながら場所を瓦礫の街へと消えていった。

「待ちやがれ！」

「殺す……ノイズは全て」

「セレナとマムの仇！」

それに伴い、ガングニールの装者達も二人を確実に仕留める為に後を追った。

「簡単にはくたばりませんよ。英雄と言うのは……弱き者達の希望なんですから」

「遺言はそれでよろしいのかしら？」

「お前は派手に立回りすぎた」

紅い霧の中での独白に返事をするように風が吹き、コインが放たれ、男は回避に専念

する。

「お前、ゼツタイに解体してやるゾ！」

「私達四人に勝つなんて自信、へし折ってあげる」

回避した先に迫る熱を帯びた結晶を機械の拳で砕き、襲いくる激流はそのまま腕を突き出して分散させる。

「折らせはしませんよ！ 僕は！ 英雄になるのだから！！」

英雄を目指す男の目は……戦士の目をしていた。



「ハア……ハア……」

「スタミナ切れ、これでおしまいね」

「フアラを倒した事は地味に評価しよう。だが、これで終わりだ」

「オマエ。そこそこ楽しめたゾ！」

オートスコアラ―4体と戦い始め数十分

何とか風を司るオートスコアラ―『フアラ』を撃破するものの彼は限界を迎えつつあった。

「フツ。まだまだ……これからです……よッ！」

男は背をむけると瓦礫の間を駆けていった。

「あーっ！ アイツ、逃げたゾ！」

「体勢を立て直されると地味に厄介だ。派手に追うぞ」

「ファラのお返しもきっちりするとしますか」

オートスコアラ―達も男を追跡する為に瓦礫の間を駆ける。

「切ちゃん…」

「調え…」

「アハツ♪ 鬼ごっこは終わりだゾ」

ガリイ、レイアと別れてD r. ウエルを探していたミカはその途中で見つけた遊びがいのありそうな小動物……調と切歌を追いかけ始めた果てに袋小路に追い込んだ。

「さあ、バラバラ解体ショーの始まりだゾ！」

「切ちゃん……」

「調……。誰か……誰かぁーっ！」

「さて、いっくぞ「君達！ 伏せて!!」……うわあっ!」

二人の少女が死を覚悟し、目を瞑った時に聞こえた男の声。  
何時までも来ない痛みにも少女達は目を開き、理由を知った。

「大丈夫ですか。君達！」

「……はい」

「……助かった……ですか？」

ボロボロの白衣に巨大な何かをつけた左腕……そして、無事なのを確認できて嬉しそうに微笑む顔。

彼は英雄になる道の途中かもしれないが……

「もう少し待っていてくださいいね。絶対に助けますから」

今の少女達にとってD r. ウエルは『英雄』だった。

「イタタ……あ、見つけたゾ！ もう逃げる暇なんてあげないゾ!!」  
「僕も逃げませんよ。君は……ここで倒す！」

「アハハハハ！ もうその左腕のオモチャも使えないゾ！」  
「ハア……ハア……。そう言う君も、随分ボロボロじゃないか」

「アハハ！ でも、これで終わりだゾ！ その後は後ろのジャリンコ達をバラバラだゾ！」

「……っ!？」

「ひいつ!?!……お、終わるのはお前の方デス！」

「ハア？」

「この人は私達のヒーローなんデス！」

「切ちゃん？」

「それがどうかしたのか？」

「ヒーローはお前みたいな悪に負ける訳ないんデス！」

「切ちゃん……そうだよね。ヒーローは負けないもんね！」

「そうデスよ調！ だから……立ってください！ 私達のヒーローさん！」

「信じてるから！ ヒーローは負けない……必ず勝つて！」

「だから、お願い（デス）!! 私達のヒーロー!!」

「……」

「そんなものは夢物語。これで本当に……終わりだゾ！」

二人の少女の願いを聞き、ボロボロの身体を奮い立たせた男は自分を仕留めようと襲いかかる人形を睨むと……

「…………ウオオオオオオツ!!」

魂からの咆哮と共に生身の右拳を顔に叩きつけた。

「ど…………どこにそんな力が残ってたんだゾ？」

その拳は重く、硬く、強く…………人形の顔にヒビが入り、広がっていく。

「英雄の武器を3つ…………教えてあげますよ」

ー1つ、自分を応援してくれる人々の声ー

ー2つ、折れることのない不屈の心ー

「そして…」

男は機械の拳で人形を打ち上げると再び右手を引いて、拳を固める。

「最後にして最強の英雄の武器は！ 己の肉体から放つ…拳!!」  
「う……うわあああああああつ!!」

突き出された拳は、叫ぶ人形の顔を捉え……粉々に打ち砕いた。

「ハア……ハア……君達はここでおとなしく待っていてくださいね。もうじき救助隊が来ますから」

「はいデス！」

「……貴方は？」

「僕にはまだ戦うべき場所が残っていますから」

「ヒーローさんならきつと大丈夫デス！ 守ってくれて感謝デス！」

「うん。ありがとう……ヒーローさん」

「どういたしまして。じゃあ、後は救助隊にしたがってくださいね」

二人の頭を優しく撫でると……二人を巻き込まない為、残る二人のオートスコアラ―を倒す為に走り去って行った。

「調…カッコ良かったデスね。ヒーローさん」

「うん。切ちゃん…顔真つ赤」

「そう言う調もデスよ」

「……うん」

「さて！ 救助隊が来るまでおとなしく待つするデス」

「そうだね、切ちゃ…ん？」

「あ！ ちょっと待つデスよ調！」

「切ちゃん。これ」

「……何デスかこれ？ 赤い水晶の付いた首飾りデスか？ しかも2つ」

「…さっきのヒーローさんのかも」

「私達二人で、いつか返せるといいデスね！」

「……うん」



## 二人で作る夕食

「ふむ。こんなもので良いかしら」

味見を済ませた女性は作っていたスープをカップ注ぎ、既に朝食の用意がほとんど完了している机に置き、朝食を完成させた。

そして、先に洗い物をしていると扉の向こうから聞きなれた足音が聞こえてくると静かに微笑みながら最後の洗い物を片付けた。

「くあく。おはよう、フイーネ」

「おはよう、クリス。さ、食べましょうか」

「ん。ふぁーい」

朝の他愛ないやり取りを交わしながら二人は何時もの様に朝食をとる。

「……あれから7年か。早いものだ。そして、私が彼女に絆されるとはなー  
フイーネはクリスと共に食事をしながら物思いに耽る。

『雪音 クリス』、世界的ヴァイオリニストの父、雪音雅律と声楽家の母ソネット・M・ユキネの間に生まれた少女。

既に二課に技術者として潜伏していた時から装者候補に名前が上がっていた折にバ

ルベルデ共和国以降連絡が途絶えた。

正規の手段での救出を予定した二課とは別に『手駒』として手中に納めるために単独で動き、1年後に雪音クリスを手中に納める事に成功する。

「始めは警戒を解くためにしていた事だが……こういうのも悪くはないな」

当初、自分に依存させる為により優しく面倒を見ていた。

時には、共に出掛けて外の世界を見せ。

勉強を教え、同じ湯に浸かり、同じベッドで寝ていた。

それは今も続いている事だが

「『大好きなフィーネへ』……か。全く、素直ではないな」

クリスが10歳になり、そろそろ利用を考えていた矢先にクリスから貰った一通の手紙

紙

差出人も書かれておらず他人からの手紙として渡したかったのだろうが顔を赤くしながら渡すからバレバレだった手紙。

中身は今までの感謝とこれからもよろしくと言った内容だったが最後の『大好きなフィーネが困ったら絶対に助けるから』と書かれていた言葉にフィーネは今まで抱いた事の感情を抱いた。

「今思えばあれが『母性』というモノなのだな」

それ以降、フィーネはクリスマスを利用する事をあまり考えなくなつた。  
ネフシユタンの回収には自ら赴き、イチイバルも強制では無く、クリスマスが求めたから  
与えたとに過ぎない。

「なあ、フィーネ……聞いてるか？」

「……すまない。何だ、クリスマス？」

「だから、今日も仕事なのかって聞いてるんだよ」

「ふむ……」

懐かしき記憶の海からクリスマスの声で今に戻すとフィーネは手帳を開いて予定を確認  
した。

「ーこんな用事、クリスマスとの時間に比べたら些細な事ねー」

「いいえ。今日はオフよ。どうかしたかしら？」

「本当か！ だったら、久々に出かけないか！」

「ええ。良いわよ」

「よっしゃ！ はむっ……よしっ！ 着替えてくる！」

「待ちなさいクリスマス……全く、せっかちなんだから」

朝食をかきこんでリスの様に頬を膨らませながら着替えに向かったクリスを微笑ましく思いながらフィーネは連絡を取り始めた。

「あ、弦十郎くん？　ちよつと悪いんだけど……」

「ふいー。今日は楽しかった。ありがとうな、フィーネ」

「いいのよクリス。私もクリスと出掛けられて楽しかったから。ほら、流すわよ」

「ん。ありがとう」

久々のお出掛けを楽しんだクリスにねだられて、フィーネは一緒にお風呂に入ってクリスの髪を洗っていた。

「クリス。夕飯は何がいいかしら？」

「んー…なあ、フィーネ。私に料理を教えてくださいませんか？」

「構わないけど、どうかしたのかしら？」

「たまにはフィーネに…飯を作ってあげたいなーって」

風呂から上がってクリスの髪を乾かしながら今日の夕飯の話をしている時に言われた言葉にフイーネは胸がいっぱいになった。

「新鮮ね。こんなに誰かに好かれるなんて」

「…フイーネ？」

「そうね。それなら今日の夕食から一緒に作りましょうか？」

「ああ！」

髪を乾かし終え、二人は共に台所に向かった。

一人は可愛い娘とも呼べる存在に料理を教える為に。

一人はもう一人の母とも呼べる存在から料理を教わる為に。

二人で作る夕食は二人の幸せに満ちている

## 滅槍・ガングニール

「ひいつ!? た…助けてくれ!」

助けるつもりなんてない。セレナとママをコイツ達は見捨てた。

私の叫びを、助けを求む声を、コイツ達は笑って聞き流した。

だから……

「助ぎえっ!………て」

コイツ達の懇願も笑って聞き流して、握った槍を振り下ろす。

「あの女はどこ…答えなさい」

私が血で汚れた槍を向けながら問いかけても怯えたままで話にならない。

だから、私は槍を更に血で染めた。

「セレナ…ママ……」

今まであったバックファイアもなく、身体が軽い。

推測の域でしかないが恐らくは適合率が上がったと仮定するのが妥当だろう。

セレナやママを守る為に手にいれたギアが守るものが無くなったことで上がるなん

て皮肉でしかないけども。

「二人がいらない世界なんて……いずれ滅ぼしてみせるから」

その為にも、真っ先に見捨てたあの女を殺す。

セレナもママもそんな事は望んでいないだろうけど

「今の私がこの槍を握る理由は……それしかないの」

焼け跡から回収したセレナとママを埋葬したあの場所に

私は、甘さと弱さを埋めて、復讐の為に動く事にした。

L i N K E R が不要になったこの力で。

――

『ねえ、マリア姉さん』

『何、セレナ?』

『私、この力でマリア姉さんやママ……それに沢山の人を救えるのかな』

『セレナ……まったく、全部抱え込もうとするんだから』

『え?』

『セレナの手で足りない分は私が救うわ。私達は、姉妹なんだから』

『マリア姉さん』

『だから、セレナは無茶しないこと。いいわね？』

『……うん！』

——

『セレナ！ セレナア!!』

『いけないマリア！ 危険です！』

『離してマム！ セレナが…セレナが!!』

『わかっていきます。だからこそ、一度落ち着くのです』

『落ち着けるわけ無いでしょ！ はなし……てッ！ セレナ、今行くわ!』

『……ッ！ マリア、危ないッ!』

『……え?』

——

『マム!……目を開けて、マムッ!』



『マ……マリア』

『ッ！ 良かった！ 待ってて、直ぐに瓦礫を退かすから!! ふんっ！……んっ……くっ……』

『マリア。私に構わず……早く』

『嫌よ！ マムもマリアも必ず助ける!!……誰か！ 誰かあッ!!』

———

『なんで……なんで誰も助けようとしらないの！ 私達を……見殺しにするつもりなのッ

！』

『マリア……もういいのです』

『マム！ そんな事言わないで！』

『私みたいな老人より……セレナを助けてあげるのです』

——そして、せ……ヲ……ト……イズ……マ……ノ……—

———

『う……嘘でしょ……』

『セレナ……返事をして……セレナアアアアアアアアアアツ!!』

「ツ!?…… 夢か」

「フンツ。やつと目覚めたか」

「キャロル……すまないわね」

「謝る必要はない。夢で苦しむお前の顔を見るのは中々面白かったからな」

「酷いわね。ガリイが貴女にそっくりなのが理解できるわ」

「当然だ。アイツ達はオレの最高傑作だからな」

「で、本当の用事はなんなのかしら? ただ嫌みを言いに来ただけじゃないでしょ」

「無論だ。鍵は揃い、準備は整った……残るは」

「『万象黙示録』の実行と完遂ってわけね」

「その通りだ。やり残しがあるなら今の内に済ませてこい。二振りの GANG ニールが到着後、万象黙示録を実行する」

「分かったわ。じゃあ、ちよつと出掛けてくるわ」

—————

「ここに来るのもこれで最後ね」

最後の報告……なんて訳でもないのだが

私はママにセレナ、そして私の甘さと弱さを捨てたこの場所に來ていた。

「ごめんなさい、ママ。私はママの最後の願いを守れなかったわ」

死へと傾いていったママの最期の言葉は、今もはっきりと覚えている。

「世界を、人を、ノイズから護るのですよー」

でも、ママやセレナを助けようともしなかつた人間を何故、私が護らないといけないのか。

何故、見ず知らずの人間を護らないといけないのか。

何故、私が世界を護らないといけないのか。

その答えは、未だに出せない。

「でも、キャロルの言う『万象黙示録』が完遂した後に再構築した世界ならば、ママが望んだ世界があるかもしれないの」

初めて私に接触し、『万象黙示録』の遂行に私を引き入れようとした彼女は言っていた。

「錬金術師のやることは分解し、理解し、再構築する事だ。『万象黙示録』が完遂し、理解し、再構築する時……オレはオレの望む世界を構築するー」

そんな彼女の目に映る色は、私にとてもよく似ていた。  
だから……

「待つてマム、セレナ。二人が生きている世界を……手に入れてみせるから」

私は、マムとセレナが生きている世界にして欲しいという条件を出し、『万象黙示録』の遂行に力を貸すことにした。

「それじゃあね。マム、セレナ。次に会うときは新しい世界かあの世でね」  
墓標の前で最後の挨拶をしてから、私は歌う。

l G r a n z i z e l   b i l f e n   g u n g n i r   t r o n l

あの日から負担の無くなったガングニールを纏い、アームドギアである槍を握りしめて、私は、キャロルから受け取っていたテレポトジエムを地面に投げて、二人が眠る場所を後にした。

チフォージュ・シャトーに帰還した時、目の前にいた私と同じギアを纏う二人に対して私は、久しぶりに自分の口で名前を伝えた。

「……貴女達が私と同じガングニールを持つ者ね。マリアよ。よろしく」

さあ、世界を否定する歌を歌いましょうか。